手話の原点を追い求めて

藤戸　裕

埼玉県

　藤戸さんは北海道出身、工業高校卒業後、埼玉の自動車会社に就職。その職場にはたくさんのろうあ者がいて、寮に帰るとやはり、ろうあ者がいて、そのなかのA君と親しくなった。

「A君は楽しい人で、マンガがうまくて、魅力のある人でした」

　仕事場で、寮で、あそびで、飲み会でといつも彼らと共に行動していた藤戸さんが、手話を覚え、職場で、組合で手話通訳らしい動きをするのは当然の流れだった。ここが、彼の手話の原点になる。

▲ エプロン姿がきまっている
▼ 後ろ姿に利用者への心遣いが

出来上がった料理を前に

10年後、彼は会社を辞め、専任手話通訳者となった。非常勤で週2.5日の勤務だった。給料は３分の１になった。それでも彼の背中を押したのは、男性の専任手話通訳者が求められたこと。付き合っていた女性（今の奥さん）が手話通訳の正職員だったこと、手話通訳者の立場がいつまでもこのような不安定なものではないと考えたからだった。その後、奥さんは退職、藤戸氏が正職員となる。

現在、上尾市社会福祉協議会で福祉にかかわる仕事に精を出す。手話通訳者の派遣、老人福祉センター、子育て支援、リフト付車両、［地域活動支援センターふれあいハウス］の事業など多種多様にわたる。パン作りの教室もその一環。

藤戸さんの気がかりは、ろうあ者の職場での手話通訳保障や、手話通訳の身分保障については本質的にほとんど変化が無いことだ。多くの手話通訳者は、非常勤は非常勤のままというのが現実だ。埼玉では、登録手話通訳者の労災加入資格の取り組みを始めたが、専任手話通訳者の身分保障は進んでいない。

利用者を送る

職場のデスクで

係長の藤戸さんと２人の専任手話通訳で通訳は3人体制になる。

悩みといえば、個人的なことではオフの日が少ないこと。オフの日にも家で原稿を書いたり、雑用に追われる日々だ。趣味はそば打ちとハイキング。そば打ちは始めて３年目で、まだまだ発展途上というところ。ハイキングはもっぱら尾瀬へ。「夫婦で出かけて、ニッコウキスゲの花なんかに出会えると感激です」

関東手話通訳問題研究討論集会の分科会で

奥さんと尾瀬にハイキング

そば打ちは奥が深い

全日本ろうあ連盟の故 河合洋祐氏が「埼玉は『どんぐりの背比べ』だけれど皆で力を出せば大きなことができる」という。埼玉は「どんぐりの家」を実現した地域なのだ。埼玉手話通訳問題研究会の会員は現在850名。10の地域班が組織されているが、これは他府県では手話サークルとして認識されているものだ。「ろうあ団体の組織は一つ、健常者の組織も一つ」という考えに基づいている。それらをまとめる運営委員が32名活躍している。手話サークルと全通研の関係を考える上で大いに参考になる事例だ。

埼玉手話通訳問題研究会の仲間とともに

写真・文　豆塚 猛